



消費と労働の脱成長

第94回日本社会学会大会 文化・社会意識（3）

2021年11月14日（日）@東京都立大学



畑山 要介

（豊橋技術科学大学）

1

目的と背景



目的とねらい

位置づけと内容

報告の目的

ケイト・ソパーの脱成長論を通じて、消費と労働の「ダウンシフト」を説明するひとつの理論的視点について考察すること。

ダウンシフト

過剰な消費主義から抜け出し、もっと余暇を持ち、スケジュールのバランスをとり、よりゆっくりしたペースで生活し、子供ともっと多くの時間を過ごし、より意義のある仕事をし、自分自身にとってもっとも深い価値観にあった日々を過ごすこと
(Schor, 1999=2011)

報告では、経済成長（GDPの増大、収入の増加）とは異なる「豊かさ」を追求する脱成長的な価値との関連でダウンシフトを捉え、禁欲ではなく**快樂**としてそれらを理解する視点を提供。

ダウンシフトをめぐる従来の議論

ポストモダンと新保守主義

ポストモダン

労働中心性の相対化。余暇を楽しむ価値の強調

- 80年代、会社人間や過剰労働が問題化され「時短」が社会的課題となる時代背景
- ・労働から消費へ ex.) パラノvsスキゾ (浅田 1984)
- ・脱組織・脱雇用 鉄の檻としての会社、雇われない生き方

新保守主義

「脱煩悩」としてのミニマリズムの倫理 (橋本 2021)

- ・エートスによる欲望制御 (清く正しく生きる、適切・シンプルに生きる)
- 楽しみを積極的に延期する「矜持」、長期的満足のために短期的満足を抑制
- 労働と消費をより高次の「意味」によって制御することで楽しみ (煩悩) を延期する。プロテスタンティズム (宗教) の機能的等価物 (cf. 禅の思想)

脱成長論の位置づけ

ポストモダンでも新保守主義でもない第3の理念型

遊び論

70年代におけるレジャー産業の相対化。井上俊『遊びの社会学』（1977）ホイジンガ、カイヨワの再考
→労働も消費も遊びで捉える（**ホモ・ルーデンス**）。

ポストモダン

新保守主義

本稿の狙いは、この導線
となる理論の考察

脱成長論

経済成長的な豊かさとは異なる「豊かさ」、収入や地位ではなくスローペースで**楽しい労働と消費**の追求。
→エコロジーへの負荷の軽減

2

消費の脱成長



脱成長論とは

欲求充足的な豊かな社会の思想

脱成長（degrowth, décroissance, post-growth）

GDPを指標とした**経済成長とは異なる「豊かさ」の指標**にもとづいて人々のウェルビーイングを高め、生態系に対する生活様式の負荷を低減させる社会のあり方やその思想。低負荷性、適切性、労働満足を指標とする生産・消費を基礎とする生活様式を示す（Gorz 1988=1997; Latouche 2019=2020）。

ケイト・ソパーの脱成長（post-growth）

「楽しさ」（pleasure）をベースに脱成長を考える。ソパーは市場経済それ自体というよりも市場経済の外部性を問題にし、**市場では満たせない人間のニーズ（欲求）をいかに充足できるか**という観点からエコロジーや消費を考察する（Soper 2007, 2011, 2016）。産業的に編成された消費や労働への忌避を楽しみの追求という現代社会のニーズとして捉える点で特徴的。



ソパールの消費論

もうひとつの快楽主義とは何か

もうひとつの快楽主義 (alternative hedonism)

消費主義的なライフスタイルの副産物（騒音、汚染、危険、ストレス、健康リスク、過剰な廃棄物、景観の破壊）を忌避し、それとは異なる仕方で消費のなかに楽しみや満足を見出す態度（Soper 2007: 211）。

→消費忌避を、産業的な消費主義の中では満たされない快楽の追求として捉える。消費量の削減や環境保護、エシカル消費、ミニマリズムなどを禁欲ではなく快楽として捉える。

消費主義批判の転換

従来の「消費主義批判＝反消費主義」は快楽を植え付ける資本主義への抵抗（Klein 1999）であり、ニーズの肥大化による市民性の喪失に対する批判であった。ソパールはニーズの否定ではなく、ニーズが満たされないことへの不満として消費主義批判を再構成する。

消費の質的向上としてのダウンシフト

良い生活の意味をめぐって

ミニマルな生活の豊かさ

消費の縮小は、当人たちにとっては生活水準の低下ではなく、生活水準の向上として体験されている。外的視点から見れば「欲求を持たなくなったように見える行為」も、当人の内的視点を理解することである種の欲求充足として理解できる。

→当人の内的視点から見えてくる「豊かさ」への着目。自発的簡素化やダウンシフトは、**生活水準の低下ではなく向上**として理解されなければならない（Soper 2016）。

cf.)未開社会の豊かさ（Sahlins 1974=1984）

- モデルとしてのソロー『森の生活』：快樂としての非消費
- 自然主義と構築主義の相対化
- エシカル消費も快樂として捉えられる。詳細は畑山（2021）

3

労働の脱成長



働くことへの視点

ニーズの非充足状態としての疎外

ニーズの充足としての労働

労働を働く者自身のニーズの充足として捉える。他者（消費者）のニーズを満たす行為としてではなく、働く自己のニーズを満たす行為としての労働。今日の労働が置かれている問題状況を、**労働ニーズが十分に充足されていないこと**としてとらえる（Soper 2020）。

疎外の再定式化

疎外を、**ニーズを充足したくてもできない状態**として捉える。つまり、商品化・市場化では満たされない部分こそが疎外を生み出している。疎外を**市場外部性**として捉える。

→労働への不満を消費と同様に「もうひとつの快樂主義」の視点で捉える。

※ソパーにとって脱成長とは、既存の成長主義的な市場経済の商品・サービス供給では満たせなくなった消費ニーズと労働ニーズをいかにして充足することができるかという問題。

技術ユートピア批判

働かなくてもよいということが、人間の「楽しさ」を充足させるわけではない

技術ユートピア Srnicek and Williams (2015)

技術による労働からの解放という言説。デジタル技術や自動化による効率化によって、苦役や単純労働が短縮化され、自由な時間が増えるという発想。

→ソパーも部分的には肯定

技術ユートピアの問題

ただし技術による負担軽減だけでは、疎外は解消しない。技術ユートピアは労働を「人々がしたくない」ものと外的視点から決めている。働く当人たちのニーズや満足度を高めるものではない。人々の本質的なニーズを、**労働時間の単純な（物理的な）短縮としてではなく、時間やプロセスの自律的な制御可能性**として理解しなければならない（Soper 2020: 86）。

- ・ダウンシフトは、労働の量的削減のみではなく質的向上の問題でもある。質的向上とは、労働者が自律的に仕事を制御できること。

アルチザン・ワーク

仕事の自律的制御

アルチザン・ワーク (Artisan Work)

技術や細部へのこだわり、個人的な関与や管理を重視する職人的な働き方。稼ぐことではなく、自分のために時間を使って、技術や精神的な集中力、そして満足感の恩恵を受ける仕事 (Soper 2020: 101-106)。

- ① 自律的な制御のもとに置かれている
- ② 稼ぐことを第一の目的としていない
- ③ 自己の楽しみとなっている

- ・ アルチザン・ワークは前近代的な職人への回顧主義でもなければ、芸術のアウラへの回帰でもない。(職人芸的な「本物」や「匠」の追求ではない。)
- ・ ある種類の職業 (クリエイティブ・クラス) の性質を指しているのではない。
- ・ アルチザン・ワークへのニーズは、現代の産業と商業のもたらす疎外感を反映している。自律的活動の楽しさへの希求。
- ・ アルチザン・ワークの充足としてのダウンシフト。

4

考察とまとめ



脱成長論のダウンシフト観

本報告のインプリケーション

- **ダウンシフトを「楽しみの充足」＝「疎外の解消」として捉える**

外的視点から見れば量的削減であるの行為は、内的視点から見れば質的向上として体験されているという見方。遊びとエコロジーの接続。

- **ポストモダンのダウンシフト観との相違**

労働回避や余暇重視、脱雇用とは異なる観点からダウンシフトを理解

- **新保守主義のダウンシフト観との相違**

高次の目的のための手段としてではなく、自己目的的なものとしてダウンシフトを捉える。



限界と課題

今後に向けて

● 日本社会の労働をめぐる固有のコンテクスト

日本では労働が「メンバーシップ」としての側面大。ソパーは「ジョブ」を前提。
→そもそも労働を「自分流」にできない固有の構造。

● その他の課題（主に労働）

- 「楽しい」と「思いこんでいた」問題（→燃え尽き、事後解釈の問題）
- 役割距離とダウンシフト
→ポストモダンの労働観は距離大、新保守主義的労働観は距離小。
→脱成長は後者に近いのか？あるいは距離の問題ではないのか。ただ「遊び」であれば、「本気になりつつも、いつでもやめられる」ことが重要？



参考文献

- 浅田彰, 1984 『逃走論——スキゾ・キッズの冒険』 筑摩書房.
- Gorz, André, 1988, *Métamorphoses du travail, quête du sens, Galilée*. (=1997, 真下俊樹訳 『労働のメタモルフォーゼ——働くことの意味を求めて』 緑風出版.
- 橋本努, 2021 『消費ミニマリズムの倫理と脱資本主義の精神』 筑摩書房.
- 畑山要介, 2021, 「快樂としてのエシカル消費——ケイト・ソパーによる認識論的転回」 橋本努編 『ロスト欲望社会——消費社会の倫理と文化はどこへ向かうのか』 勁草書房.
- 井上俊, 1977 『遊びの社会学』 世界思想社.
- Latouche, 2019, *La décroissance, Que sais-je?* (=2020, 中野佳裕訳 『脱成長』 白水社.)
- Sahlins, Marshall, 1974, *Stone Age Economics*, Transaction Publishers. (=1984, 山内昶訳 『石器時代の経済学』 法政大学出版社.)
- Schor, Juliet, 1999, *The Overspent American*, Basic Books. (=2011, 森岡孝二訳 『浪費するアメリカ人——なぜ要らないものまで欲しがるか』 岩波書店.)
- Soper, Kate, 2007, "Re-thinking the 'Good Life': The Citizenship Dimension of Consumer Disaffection with Consumerism," *Journal of Consumer Culture*, 7(2): 205–229.
- Soper, Kate, 2011, "Alternative Hedonism, Cultural Theory and the Role of Aesthetic Revisioning," Sam Binkley and Jo Litter eds., *Cultural Studies and Anti-Consumerism: A Critical Encounter*, Oxford: Routledge, 49–69.
- Soper, Kate, 2016, "Towards a Sustainable Flourishing: Ethical Consumption and the Politics of Prosperity," *Ethics and Morality in Consumption: Interdisciplinary Perspectives*, Routledge: 11–25.
- Soper, Kate, 2020, *Post-Growth Living: For Alternative Hedonism*, Verso.
- Srnicek, Nick and Alex Williams, 2015, *Inventing the Future: Postcapitalism and a World Without Work*, Verso.